

を及ぼすものもある。

「こうしてみると」、〈図書〉のかたちを採っているかどうかにかかわりなく、一次情報的なものの扱いと二次情報的なものの扱いには、明確な「機能分掌」があっても良いのではないかという考えが、「浮かび上がってくるのである」。前者については数年毎に検討がなされ、集められたものの大部分は破棄されて、一部分だけが永久保存されるかたちに移されても良い。そして後者については、言うまでもなく永久保存が最初からの前提になる。

さらに言えば、前者に関してはそのとき大学に研究者のいないものは無視しても差し支えないが、

後者に関してはおよそ学問・研究に関係のあるものについては、そのときにそこに専門の研究者がいようがいまいが、総て収集しておくというのが原則でなければならない。

図書館がこの二つをともに扱うことは、それはそれで良いであろう。しかし、扱い方は全く違うべきではないのか。そしてこれは、科学の、いや、学問研究全体の在りかたについていろいろ考えなければならない問題自体とも、いくらか似ているような気がしている。みんなで、こういう「関係を議論しておくことも大切なことと思っている」のである。
(1988年11月12日)

《「特殊コレクション」巡り》 ④

本草学関係文献紹介

本 草 文 献

薬学部教授 田 端 守

薬学部図書室に所蔵する特殊コレクションの最たるものは本草文献であるが、その紹介に先立ち、本草書の歴史について簡単な解説を加えておく。

「本草」という呼称は漢の時代から用いられ、「薬は草を本にする」ことが語源といわれている。事実、本草書が収載する薬品の大半は植物性の生薬であるが、動物・鉱物性生薬をも多数含むので、その内容は漢方医学で使用された天然薬物全般に及ぶ文献であるといえる。

最も古い本草書は、後漢の頃に成立したといわれる「神農本草經」（著者不明）であるが、後に陶弘景（452—536）が伝承薬物を365品（上薬120，中薬120，下薬125）に整理してそれぞれの性状と薬効を記録し、これに自ら選んだ他の薬物 365 品を加えて「本草經集注」7巻を著わした。この撰書が後世の本草文献の基礎となり、唐の高宗の時代（659）にこれを改訂増補した勅撰本「新修本

草」（850品目，原本存在せず）が刊行された。後者の写本の一部（5巻）は、国宝として仁和寺に保存されているが、その写真複製本が薬学部にある。

宋代になると、新修本草に薬物や文献の附加、改訂が次々に行われ、陳藏器の「本草拾遺」10巻（739）をはじめ、勅命による官製本「開宝重定本草」（974）、「經史証類備急本草」（1091—3）、「經史証類大觀本草」（1108）、「政和新修經史証類備用本草」（1116）、「紹興校定經史証類備急本草」（1159）、「重修改和經史証類備用本草」（1249）など、いわゆる証類本草が続々と編纂された。収載された品目の数も改訂につれて増加し、上記の大觀本草では1746品を数える。また記述も詳しくなり、各薬物の気味、薬効、別名、分布、採収・加工、参考文献の拔萃、調剤・投与法などを総括している。

明代に至ると、李時珍が独自に著わした薬物大百科辞典「本草綱目」52巻（1590）が出版され、薬品数は1890余種に達した。この初版（金陵本）を1607年に林道春が入手してのち、その翻刻本が日本国中に流布して貴重な文献となり、本草家、医家に多大の影響を与えたのである。

上述した中国の本草文献は、2000年以上にわたる中国人の経験に基づく薬物知識を集積した宝庫であり、世界に比類がない巨大な文化遺産であるといえよう。

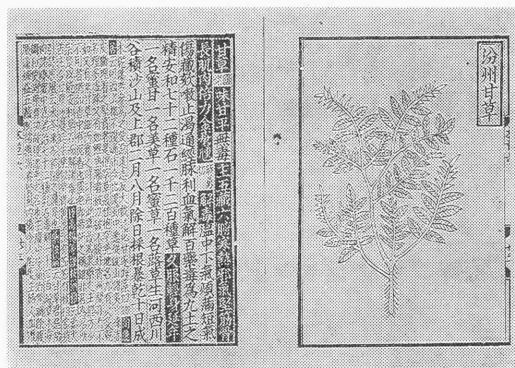
一方、漢方医学を伝承した日本においては、主に江戸時代に入ってから、中国本草書の復刻本や注釈本を見るほかに、人見必大の「本朝食鑑」

（1677）、貝原益軒の「大和本草」（1708）、独自の薬物論を展開した香川修徳の「一本堂薬選」3巻（1729）や吉益東洞の「薬徴」3冊（1771）など優れた著作が出版され、さらに1803年には、本草学から博物学への発展を示した小野蘭山の大著「本草綱目啓蒙」48巻が刊行されるに至った。また、薬用植物の写生図としては、世界に誇るべき原色植物大図鑑である岩崎常正の大作「本草図譜」が1828年に完成されている。

ところで、薬学部が所蔵する本草関係書物は、中国（107点）及び日本（336点）で刊行されたものを併せて約443点を数え、全国でも有数のコレクションであり、薬系大学ではこれに優るものがないと思われる。ここでは紙数の制限上、56点を選んで以下に掲載し、読者の参考に供することと

する。なお、各書の説明については、岡西為人著「本草概説」（創元社、1977）などを参照されたい。

本コレクションのうち、木村康一教授が生薬学講座のために入手された柯氏本大観本草は、朱墨のにじんだ新しい版の美しいものであり、貴重な資料である。また、富山藩主前田利保編「本草通串証図」5巻（1853）は精密な邦産薬草彩色図を収めた美しい貴重書である。



本草書は、和漢薬の研究にとって不可欠な文献であるとともに、伝統薬物から新薬を発見、開発する上で最も貴重な情報源でもある。漢薬の考証並びに科学的研究にとって、先人が苦心惨憺の末蒐集した薬学部の本草文献の存在価値はきわめて大きい。今後も完全な保存に努力する必要があるが、死蔵に終ることなく、医学・薬学の研究に活用されることを望むものである。

巻懐食鑑 香月牛山

京都 茨城多左衛門等合刻 明和3（1766）

宜禁本草 曲直瀬道三（玄鑑）

杉田良菴開板 元禄13（1700）

宜禁本草集要歌 巻4～7

延宝7（1679）

救荒本草 正補合併 周憲王

附 救荒野譜 王西樓

經史証類大観本草 唐慎微

柯逢時序 光緒30（1904）

經史証類備急本草 王繼先等

東京 春陽堂 昭和8（1933）

広群芳譜 佩文斎

康熙47（1708）

古方薬品考 内藤尚賢著 生島泰良校

平安 文泉堂 天保13（1842）

質問本草 呉継志（子善）撰 曾愿校訂

天保8（1837）

重修政和經史証類備用本草 唐慎微

曹孝忠等校正 成化4（1468）

袖珍本草偁 平住専安遺書 松岡玄達鑒定

宝暦5（1755）

- 植学啓原 宇田川榕菴
風雲堂 天保6 (1835)
- 植物名実図考 吳其濬著 陸応穀校
道光21 (1841)
- 食物本草・日用本草 李東垣編
京都 山屋治右衛門 慶安4 (1651)
- 諸州採薬記抄録 植村政勝 (左平次)
- 新修本草 卷15獸禽部
大阪 本草図書刊行会 昭和12 (1937)
- 新修本草 仁和寺本新修本草残卷5冊
大阪 本草図書刊行会 昭和11 (1936)
- 神農本經
大阪 泉屋卯兵衛 寛保3 (1743)
- 神農本草經 丹波元堅
嘉永7 (1854)
- 神農本草經疏 繆希雍
天啓5 (1652)
- 神農本草經百種録 胎洄溪
躋寿館聚珍版 享和3 (1803)
- 齊民要術 賈思勰
嘉靖3 (1524)
- 千金翼方 景元大德本 孫思邈
光緒4 (1878)
- 草本図説 (新訂) 飯沼慾斎
明治7 (1874)
- 本經序疏要 鄒澍
道光20 (1840)
- 本經逢原 張璐 (路玉)
康熙34 (1695)
- 本草衍義 寇宗奭
光緒3 (1877)
- 本草匯 郭佩蘭
江戸 山田長右衛門 元禄6 (1693)
- 本草原始合雷公炮製 李正宇
乾隆51 (1657)
- 本草綱目 江西版 李時珍
萬曆31 (1603)
- 本草綱目 李時珍著 稻生若水校
京都 唐本屋八郎兵衛 正徳4 (1714)
- 本草綱目啓蒙 小野蘭山
京都 林喜兵衛 享和3 (1803)
- 本草綱目拾遺 趙學敏
同治10 (1871)
- 本草從新 吳儀洛
乾隆22 (1757)
- 本草述 劉若金
嘉慶15 (1810)
- 本草述鉤元 楊時泰
同治11 (1872)
- 本草序例 (改正新刊) 加藤宗乾
京都 聚文堂 寛永16 (1639)
- 本草図譜 山草部・芳草部 岩崎瀧園
江戸 須原屋茂兵衛 文政13 (1830)
- 本草図譜 岩崎瀧園
東京 本草図譜刊行会 大正5~11 (1916~22)
- 本草通串 正宗敦夫
東京 日本古典全集刊行会 昭和12 (1937)
- 本草通串證図 前田利保 (萬香亭) 等
嘉永6 (1853)
- 本草摘要
京師 西村喜兵衛板 元禄10 (1697)
- 本草備要 汪昂 (詔菴)
京都 植村藤治郎 享保14 (1729)
- 本草品彙精要四十二卷 劉文泰
民国26 (1937)
- 本草和名 深江輔仁
江戸 和泉屋庄次郎 寛政3 (1791)
- 本朝食鑑 平野必大
元禄5 (1692) 自序
- 藥籠本草 香月牛山 (貞庵)
享保19 (1734)
- 大和本草 貝原益軒
京都 永田調兵衛 宝永6 (1709)
- 用藥須知 松岡玄達 (恕菴)
翠栢堂 享保11 (1726)
- 用藥須知 松岡玄達 (恕菴)
前編 享保11 (1726) 後編 宝暦9 (1759)